
zombie crisis

白河一月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

zombie crisis

【ゾード】

N4621G

【作者名】

白河一月

【あらすじ】

2時間で一つの町が死滅し、生き残った市民を喰らう。噛まれたら奴らの仲間入り。彼らは無事この地獄から脱出できるか。

序章（前書き）

初めてのジャンルのです。続けて行きたこと思こます。

序章

5月12日（木）

S県八条市

大日本製薬会社

地下2階研究室

「ふわああ～」

無精髭を生やした中年の男性が周りを気にせず大きめの欠伸をした。それを見ていた眼鏡を掛けコンピューターに向き合っていた若い男性が苦笑した。

「大きな欠伸ですね」

作業を中断し椅子にもたれたまま天井を見ている先程の男性に話しかけた。

「3日だぜ。解るか？こんなモグラ生活を続けて。外では新作映画やらピクニックで浮かれたカップルや幸せいっぱいのファミリーがいるつてのに」

この研究所は地下にある分だけ危険な細菌や病原体が存在する。

そのため、ここでは一般企業と違い特殊な実験や研究を行っている。だからここに勤める研究員とスタッフは常に缶詰状態である。

一応外に出ることは許可されているが、厳しい身体検査と持ち物検査、そして新しいIDの発行と面倒臭いため、滅多な事が無い限りこここの住人は外には出ない。

その事で不満を言う社員がいても変えようとはしない。ここに勤めている者ならば誰もが認識しているからである。

ここのLev 14のウイルスの危険性を…

「確かに息が詰まるかも知れませんが、まだマシな方ですよ。好きなことを生業にして、その上、お金が貰える。

文句なんかつけられませんよ」

無精髭の男性は頭をかき、眼鏡を掛けた男性を見る。

「そんなこと言えんのは若い間だけさ。

家庭を持つてみる…見ず知らずの男が家に上がりこんで、ソファーでくつろぐんだぞ。

怒声を上げて机を叩いたら娘が飛んで来て『〇〇君に向するのよ』つて叫ぶんだぜ。

俺の知らぬ間にカレシを作りやがった！

信じられるか！』

話しを聞いていた男性はどうコメントしていいか解らず、苦笑しながらコンピューターに視線を戻す。

左側のコンピューターの異変に気が付いた。

赤いランプが点滅している。

『…でよ、そいつがまた気に食わないヤローでさ、娘のことを『怜美』って呼び捨てで…』

「大変だ…」

眼鏡を掛けた男性の顔が見る見る青くなつていぐ。

「つん、どうした？」

「事故だ」

「…はあ？」

『level4のドラフト（薬物処理機）が事故を起こして…』

「なつなに！」

「100%換気されていな…一部がダストを通して外部に…」

「つな、まずいぞ。急いで上に連絡を…」

無精髭の男性は慌ただしく電話を掛ける。

「待つてください。

僕達が今氣付いたということはきっと上はもう知っているはずです

男性の話しを聞かずに電話を掛ける呼び鈴だけで通じない。

『…』にいる人間には抗体がありますが、上の一般社員達は…

「クソ、通じない」

痺れを切らし受話器をたたき付ける。

「ここは地下で安全です。しかし、地上は…」

「冗談はよしてくれ、地上には娘がいるんだぞ。

起き上がりのゾンビウイルスが地上で充満してゐてか」

「それはありません。

“アレ”は気化が早いはず…ですので、おそらくは上の会社だけ…

沈黙が続く。

気が付けば周りが騒がしい怒声やら感嘆の声が響く。
「緊急事態発生、緊急事態発生、Leve14ウイルスが地上に流出。職員及び研究員は速やかに持ち場に戻り班長の命令に従うこと。なお、気分が優れない方、抗体を打っていない方は至急医務室もしくはLeve14研究室にまで来てください。地上に通じるエレベーターは隔離のため使用停止、階段の使用は禁止します。繰り返します…」

地上の建物と比べ地下の研究所ではおびただしい数のアラームとセンサーが一斉に鳴つている。

例え地上が死の国に成り果てようともここならば安全だ。
現時点、ここは旧聖書の“ノアの箱舟”と化したのだ。
無力な父親は黙つて見るほかなかつた。
娘が助けを必要としているのに…

苛立ちを覚えガラス製品のテーブルを拳で叩き割つた。

こつして悪夢は始まつた。

第一章 脱出（前書き）

「でもー、更新遅れました。」「めんなれー。」
いろいろ伏線を張りますので、よく文章に注目してお読みください。

第一章 脱出

5月12日（木）

S県八条市

県立八条高校

事件発生から10分前

晴天と広がる中、一人の少年は窓際の席から雲を眺めていた。その時間帯はどこも授業中であり、隣のクラスからも英語の発音が聞こえる。現在受けている古典の授業よりもこちらの方がよく聞こえるのは担当の先生が70半ばの臨時教師であり、時折聞こえる耳障りな歎をする音を紛らすためでもある。

「だりい」

彼、夏川純一は心の中に溜まっていた感情を口にすることにした。結果、変わらない。もともと、聞こえないように小声で言ったのだが、気に食わなかつたのか苦虫をすり潰すような顔をした後、机に突つ伏すした。

「暇だ」

今度の言葉は心の中で言つたのか実際口にしたのか分からぬ。考える思考の前に、昨夜夜更かししていた分の睡魔が襲いかかり眠つてしまつた。

10分後

大日本製薬会社

1F 警備員室

「…だからすぐに来てください」

茶髪の若い男性は荒げた声で電話相手と話していた。小1時間前、のんきに上司と携帯ゲーム機で遊んでいた時、清掃員が一本の電話が入った。内容は「臭いから薬品が漏れているかもしない。調べてくれ」だった。当然のことながら、遊んでいたため軽くメモしスルーしてしまった。あの時に、速い対応を行っていても結果は変わらなかつたが、今よりはましなのかもしない。そつ、ロメロの映画のように死者がうろつくのだから。

「…お願いします」

受話器を下ろし上司の方に向きを変え「通報しました」と告げた。

「こつころ来る」

尋ねたのはこのバイトを紹介してもらい、狩りをしようぜと誘つた、二回上の先輩だ。いつも言つ軽口はなく頭から汗を流しあごどとしている。

「地元警察が10弱で着くと言つてます。落ち着いて行動するとのことです…」

「そうか」

室内には三人の警備員がいた。それぞれ自体が事態だけに神妙な顔達をしている。落ち着きのない若者に対し白髪の男性だけ冷静だった。

「どうする、おい…。何とか言えよ」

「警察が来るまで籠城じゃないですか」

若者同士でこれから話をしている間、白髪の男性だけこの事態について考えていた。

小一時間前に清掃員が異臭に感知、会社の地下駐車場で不審者、外部からの犯行でなく会社内で襲撃、地元警察の落ち着きよつからっこだけ、……つまり会社内での発生！だったらあの噂は事実。

男性は考えがまとめ、報告書に記入し始めた。その異常な行動を目

にした残り一人の警備員はは考える限りの侮蔑と罵倒を述べ、話を戻す。自分の見解を書き終えた男性は最近、嫁に行つた娘からいつでも連絡できるようにと渡された携帯電話を取り出し、画面を見た。そこには幼い孫と娘夫婦が仲良く笑つてゐる写真だった。「幸子」と咳き胸にしつかりと抱き抱えた。

それと同時に窓から奴らが侵入してきた。情けない悲鳴を上げわれ先にへと出入り口を目指す若い警備員たち。ドアを開け逃げようとしたとき、両端から奴らが喰らい付き茶髪の青年の首にかみついた。鮮血と悲鳴を上げそこに奴らが群がる。

先輩にあたる警備員はそんな彼を見捨て、窓から逃げようとしたが通路の床に張つていた奴らが先輩警備員の足を掴み、バランスを崩して後ろに倒れた。すかさず奴らが襲いかかり絶叫を上げた。最後まで残つた年配の警備員は顔を上げず俯いたままの状態で襲われた。

奴らが食事をしてゐる最中一本の電話がなり響いていた。受話器を取ろうとする者はおらず、誰もいない廊下で自己の存在を主張するかのように……

そう、パンドラの箱はここから開けられた……

人々は奴らという災厄から逃れるため逃げ惑う……
獲物として認識されないように……

第一章 脱出（後書き）

この小説は映画研究部の友人Aからの依頼だった。
私は喜んで書いた。

なのに…彼は…

～電話中～

「…どこまで書けた？」

「え、脱出するとこ」

「あれ、ヒロイン拉致？」

「ヒロイン？」

「ん？名に書いてるのかな（汗）」

「ゾンビモノ」

「…君、君に書いて欲しいのは恋愛モノだよ」

「…は？」

沈黙は数秒だったが俺には一時間位に感じられた。
もちろんのことながら口論となり、10分で仲直り。
締切は2週間。ファイト、俺！

ちなみに、彼とは仲良じじやないよ。ただお互いの事情を合理的に
解決しただけ（喧嘩は時間の無駄）

第2話（前書き）

あとがきにはキャラ紹介しますので文章でキャラが分かりにくい人はこちらでご覧ください。
あと「ぼれ話」も

同日 15:32分

S県八条市
県立八条高校

「ばっかだな、お前」

5限目の古典は終了し休み時間に入った現在、複数の生徒が一人の少年を馬鹿にしていた。少年は夏川純一で、彼は授業中居眠りをしていたが、それが教師にばれてしまい来週の授業に古典訳を教壇の前で発表するという羞恥のプレイの予約をされてしまった。しかも、教科書だけでノート無し。そもそも彼は寝ていたのでノートをちゃんと取れているか知れないが…

罵る声が聞こえるが夏川は無視した。言い返すと何を言われるか分かつてているから…

彼は決して成績が悪いわけではない。ある程度の知識は持ち合わせている。しかし、古典だけは苦手だった。羅列された古文字と蛇のように曲がった漢字は解読不明。おまけに古典だけ書き込みの授業つまり、次々と書き込むので黒板に書いた説明をすぐに消してしまう。生徒のやる気をなくす授業、彼は少なくともそのように認識している。その為、古典が成績不振なのかは知らないが。

「災難ね」

気がつけば、この少年たちの中には似合わないくらいかわいい少女がいた。

夏川は聞きなれた声に反応し顔を上げる。

「木村…さん？」

少女は笑顔で答えた。

木村加奈子はなかなかの容姿を持ち、それなりに親しみやすい子だ。しかし、彼女には少々困った癖がある。万引きとさぼり癖だ。万引きもさぼりも当時付き合っていた友達による影響であり、事を起こす度に補導されていた。彼女は中流家庭で両親は共働き。そのため、家に帰らないことも多い。不良少女といつやつだ。

夏川の彼女に関する新しい記憶を探ると、1・2週間前に万引きで補導され、謹慎処分を受けていたはず。ここにいるということは謹慎は解けた？

「謹慎なら三日前に解けたよ」

三日前と言つと月曜、謹慎は1週間前か…。

「よくみつかったね。いつもちよろいつて言つてたのに」

「そうなのよね。友達が見つかって、売られた」

売られた？その言葉に反応し突つ伏していた体全体を起こした。

「マジ？」

「マジよマジ。そのせいで親は来るわ、髪も染め直されるわ、反省文も書かせるわで大変だったのよ、マジで」

彼女の言つ通り派手だった茶髪から漆黒の黒髪には染まつていた。黒髪は彼女自身を引き出すかの如く美しい。夏川個人としてもあんな派手な色より黒の方が似合う。

「あんなのと付き合うからだろ。いい加減縁切れよ」

一応言つてみた。今までも言つてきたが耳を貸さずいたがこんどはと思いつことにした。

「形だけなら縁を切つたわ」

今のは発言で眠つていた、眠りかけていた全神経が覚醒した。夏川は立ち上がり机に身を乗り上がった。

「ほんとか今の」

「うん。といつてもあたしが一人で言つてるだけだしね。向こうはそんな気はないし」

夏川は嬉しい反面複雑な気持ちでいた。こんなに早く別れるならもつと早く…あの時は……

「加奈子」

ふと声のする方へ目をやると一人の男子生徒が入り口に佇んでいた。

「しゅうちゃん」

加奈子はしゅうちゃんと呼ばれた男子生徒のもとへ駆けだし、抱きついた。

片岡修平。今の加奈子の彼氏。

そうだった。元に戻つてももう戻らない…あの頃には……

加奈子がじやあねと声をかけ廊下に出るが返事をしなかつた。いつ見てもあの一人のカツプリングは胃がきしむ。奥歯を噛み、色のない眼で見送る。少し反応して手を上げるが、もうそこには誰もいない。その一部始終を見ていた、あの罵つていた男子生徒達はこちらに近づき、気にするなど肩をたたく。普段馬鹿にする癖に余計なところで氣を使つ。名も知らない男子生徒に最大限の感謝を送つた。

氷室徹夜は授業の開始から休み時間の間中ずっと本を読んでいた。本のタイトルは『近代哲学と現代社会』。図書館から二日前借りた哲学書は彼の時間つぶし専用と化していた。授業中ならず休み時間昼休みもそのような類の本を読む彼は周りから異端者とされ、クラスから除外者とされていた。転校した初日から周りとはあまり話さず、読書を続ける彼は親しき友人はほんの一握り程度だ。

次の章に移るとき、1時間休みなしで読んだのでしおりを挟み目薬をしだした。改めて眼鏡をかけ、外の様子を見たとき彼は初めて知ることとなる。これから始まる地獄と試練を……

校門前では多量の車が停車し、渋滞を引き起こしていた。整理にあ

たった教師も困惑している状態だ。生徒の保護者達が一斉に迎えに来たのだ。それも、参観日でもないのに両親で。中には兄弟であろうか幼さが残つた少年少女もいる。よく見れば、車内やボンネットの上に旅行鞄を持ちこんでいた。家族旅行というわけではなさそうだ。だとしても、無計画すぎる。

息子を迎えてきたんです、娘を…、会わせてください、門を開けて…、そういった一方的なやり取りに教師は動搖するばかり。さらに集まつてくるので事態はさらに悪化している。

警察でも呼ぼうかな、そう考え職員室にへと向かおうとしたとき、父兄らが門を勝手に開けようとした。教師たちは止めようとしたが、一人や一人ではなくどうしようもなかつた。

ついに門が開かれ、車が動き出す。教師たちは隅に避難し見送った。先頭車両が走行中、一人の男性が道路の真ん中に立ちふさいだ。あわててブレーキを踏んだら後ろの車両と激突。クラッシュを起こした。車が玉突き事故を起こし、教師が事態の收拾にあたる。先頭車両を運転していた父兄が文句を言いに近づいた。

男性は生氣がなく口を半開きにしてよだれを垂らしていた。姿から見れば、どうやらここに清掃員のようだが…

父兄が手を伸ばしたとき、清掃員が手に噛みついた。

悲鳴を上げる父兄。助手席に乗つていた妻が止めにかかるも口を話さない。教師も異常な事態を察知し近づいた。父兄が力任せで引き離し妻が噛まれた手を介抱する。

「肉を…肉を食いちぎりやがつた」

再び襲いかかるころには教師たちも到着していた。

「我々の不手際を申し訳ありません」

教師の中でも年配の教師が襲われた父兄に頭を下げた。残りの教師は清掃員を抑える。父兄は食いつかれた手を抑え息継ぎをする。それは大きく何度も息継ぎをしている。

「教頭先生ー」

呼ばれた方に向きなおすとそこには清掃員と同じ生氣のない顔をし

た者たちがこちらに近づいている。父兄らも何とか逃れようと我先にこちらに向かう。誘導にあたっていた教師は奴らに襲われ絶叫を上げる。絶叫は遠くからも聞こえた。

「なつ何が起きて……」「ぐえ、が、が……」

取り押されていた教師に清掃員が噛みついていた。鮮血が清掃員にかかる。押されていたもう一人の教師は走って逃げていた。

混沌というのはまさにこのことだつた。生者と死者……最もたとえ安く分かりやすいもの。地獄に帰れなくなつた住人は地上に現れ、腹いせ紛れか道ずれのつもりなのか、我々（生者）を襲い、ともに彷徨わせる。

死者の波は教頭にまでおよび、さらに数を増す。

この時にはさすがに生徒たちも気が付いていた。

このことがもつと早く気が付いていればおそらく……

第2話（後書き）

夏川純一（17）

身長177cm A型 8月25日生まれ

短髪の黒髪でなかなかの美形。おせつかいな性格で特に親しい友達はおらずあまり満足した学園生活を送つてはいない。以前は加奈子という彼女がいたが、文章で書いてある通り、悪い友達との付き合いで度々の衝突（純一が加奈子の万引きを店員に告発し謝辞の言葉と被害損額の返金がばれた）で破局。それからは後悔しつつも加奈子の非行を止めるべく何度も説得。このおせつかいが後々に不幸をもたらした…

木村加奈子（17）O型 11月5日生まれ

ズボラな性格で、流されやすい。文中通り結構な美人。純一という彼氏がいながらも修平と度々…。純一のおせつかいには感謝をしつつも態度に示さない。修平と付き合つても純一のこととは気にかけている。周りの女子からは尻軽と呼ばれ一部敵視している。

片岡修平（18）AB型 4月1日生まれ

純一たちとは一つ上の先輩。読者モデル採用と言つたかなりの容姿。加奈子と付き合う前には様々な子と付き合つており、今でもその関係は…。実は加奈子が流されやすい性格を知つており、悪い友人を仕向けおせつかいな純一の性格を利用し破局にへと追いやつた張本人。

氷室徹夜（17）A型 11月25日生まれ

読書をこよなく愛する男。もともと地元民ではなく沿岸地方から引っ越してきた。一人暮らしで両親は妹と前にいたところに住んでいる。文中でも述べた通り友達は少ない。ある事件が原因で山で囮ま

れた八条市に引っ越した。

教頭先生（55）

おまけです。生徒第一で穏健な人。木村加奈子らの数回の補導に関して、全て1週間という割と軽い罰で済ますなどして上から睨まれている。加奈子らは味をしめており、大して反省しておらず、むしろ怒りを買っている。うーん、恩知らずな奴。

アーカイブ（前書き）

ども！忘れずその日に投稿！理系男は変わります。
飛ばすと会話の流れやそれぞれの心情等が分からなくなつたりします。
見といた方がお得です。

ちょくちょくこのアーカイブ（知らない人はググって）を出します。
不規則です。

質問があればなんなりと！キャラのことはたぶんあとがきに書きます。
す。私個人のことでしたら前書きに 多分不要

アーカイブ

警備員の報告書

5月12日（木） 12:03

報告者 前川拓也

本日11:58にてボイラー管理人から地下からの通気口で異臭がするとの報告。技術者が数名駆け付けたところ鼻をさす刺激臭がフロア一帯に充満しているとの模様。担当の技術者は地下の実験室からアンモニアの類が漏れているとの判断。ドラフトの漏れの確認の為、管理室経由で後に報告する予定。なお、立ち会った技術者は隅田大輔と三村

＜文章は途中で終わっている＞

警備員のメモ

5/12（木） 13:27

執筆者 原上雅海

13:09頃に南練から暴動が起きた。また、2F医務室でも医師に噛みつくといった行為が勃発。警備員が駆け付けたところ既にフロア全域に広がっており、南練フロアを封鎖。

東練フロアにて、具合が悪いと申す者、南練フロアから避難した者、負傷したものが暴動を行った。どうやら噛まれたりした者が奴らにと…

この会社はおそらく隔離されるだらう。南練に位置するこの警備員室にもおそらく手遅れ。

このメモを見た者は奴らに噛みつかれないように注意しろ。あと、できれば八条市市警の花形という刑事にすまないそして地下へ行けと伝えてほしい。

反省文

5月4日（月）

氏名 木村加奈子

私木村加奈子はショッピングプラザコスモにて化粧水3つと衣服2着を万引きしました。ゴールデンウイーク中に軽はずみの行動を起こしてしまい誠に申し訳ありません。今後、このようなことのないように行動を慎み、地域に貢献する学生のあるまじき姿にこだわるよう努力します。

担任 柴山方正

代表 後藤久慈

手紙

消印は4月30日（木）

For 氷室徹夜様

From 氷室瞳

こんにちは。兄さんお元気にしてますか。こちらは元気です。いい加減携帯電話を持とうよ。連絡先、私にだけ教えてくれないし……。入学式は行けなくてごめん。そちらに着いて1ヶ月経ちましたね。新しい友達は出来ましたか？お父さんもお母さんも兄さんのことを心配しています。あの事件は兄さん一人の責任じゃないよ。兄さんは被害者……ごめん。消そうかと思つたけどやつぱり……。来週のゴールデンウイークは帰つてきますか？絶対に帰つてきてください。近藤君も兄さんの友達も謝りたいと言つてます。帰つたら「どうぞう作つて待つてます。

PS 誰も兄さんのこと怒つてないよ

手紙

消印は5月10日(日)

For 氷室徹夜様

Form 氷室瞳

兄さんはサイテーです。ゴールデンウィーク中ずっとどうぞう作つて待つてました。近藤君も兄さんのお友達もどこにも行かずずっと……。そんなに逃げたいんだつたらずつとそこについてください。

PS 兄さんなんて 大嫌い 死んじやえ

濃い> <手紙は所々湿つていてる。PSの筆圧が

アーカイブ（後書き）

前川拓也 (20)

茶髪の警備員さんです。樂観的な性格でこのバイトも大学の名前で合格したもの。彼が報告をしていれば会社の不祥事事件で済んだだけなのに……

菱田俊三 (21)

先輩警備員。こいつが一番(?)悪い。狩りしようぜってバイト先にゲームは……。ちなみに彼はまともに仕事をしておらずトイレで日々ゲームのテクニックを上げている。

原上雅海 (68)

じいちゃん。元S県警の殺人課(1課)の係長さん。定年後息子夫妻のツテを使って入社。この人は花形という後輩刑事にある噂を聞き内部事情の密告を頼まれたが、その噂が眞実なら娘夫妻の職を失うかもしぬなかつたので断つてしまった。まあ、警備員だから知ることも限られているから無意味かと?

氷室瞳 (15)

徹夜の故郷の高校でピカピカの一年生。お兄ちゃんっ子で人懐っこい性格。徹夜が過去に犯した傷害事件の時に心の壁ができてしまい、距離(物理的でなく心の)を置いている。

近藤結城 (18)

傷害事件の被害者。頭に2針の大けがを負い、精神的にもダメージを受けている。もともと徹夜とは人並みに仲が良くよく話したりしていた。近藤が徹夜の私物を無断に借用し紛失。そのことで激怒した徹夜の犯行となっているが……

第3話（前書き）

最後の『』は放送内容を表します。

第3話

同日 16:42

S県八条市
八条高校 音楽室

「もつとバリケードになるものを、急げ」

八条高校の音楽室では異様な熱気に包まれていた。

男子生徒が音楽室のドアに机や椅子、楽器などの重くてバリケードに適しているものを積み上げているのだ。積み上げたものは既に天井にまで届いている。それでもまだこれでもかと言つくらい積み上げようとしているのだ。

「もうこれくらいでいいだろ」

作業をしていた眼鏡をかけた男子生徒が荒い息継ぎをしながら、作業をしている生徒たちに言つた。

積み上げ作業を行つていた男子が、一斉に作業を止め散り散りに動く。それぞれ、余つた椅子に座つたり床に寝ころぶなどして自由にした。

この部屋だけで恐らく、20人はいるだろ。しかも、その大半が男子だ。

夏川はここへ来る前、木村加奈子を探すため、逃げるのに出遅れたのだ。加奈子は見つからなかつたが、加奈子が生徒たちと体育館に逃げていくのを窓から確認し無事であることが分かつた。しかし、体育館に向かう途中、大量のゾンビが廊下一杯になだれ込み加奈子どころではなく、身を隠すこととした。その過程でここの中ミコニーティーに入れたのだが……

「リーダーは僕だ。僕の命令に従え」

「ふざけんな！だれがいつ決めた」

「僕はこここの生徒会副会長だ。非常時には生徒の安全確保のため生徒会の命令に従う……生徒手帳にも書いてあつたる」

「しるか。第一今はそれどころじゃねえだろ。生きるか死ぬかの瀬戸際に規則もクソもあるか！」

ついさつきからずつとこつだ。

夏川は半身あきれ返つていた。自分の意見しか言わないのにビリやつて解決するんだ？

声には出さない。無理に介入すると事態がややこしくなる。かいていた胡坐を解き体育座りで身を窓際に寄せた。

加奈子……無事でいてくれよ……

夏川は罵りあつてゐる生徒たちの中で自分の身を考えず、ただ、家族と最愛の恋人のことを想つていた。

16・17

S県八条市

八条高校 旧館2F 小教室内

「陽子……お願ひだから起きてよ……よつこよ……」

涙交じりで少女は今しがた息を引き取つた少女の死に向き合つていた。

葉柱陽子は親友の美空雲を助けるためにゾンビに数ヵ所噛まれたのだ。幸い、噛まれた時に発した悲鳴で近くにいた男子生徒にゾンビを退治してもらつたものの噛みつかれた個所が首や手首と言つた血の流れる血管が浮き出ているところで、噛まれた時に体内の血液のほとんどが流れ、ショック性多量出血で死んでしまつた。

親友の死に嘆く少女の傍らには見る限りうつとしそうにしている男

子生徒がいた。

苛立つてゐるのか、持つてゐるバットを指でコンコンとつついでいる。

「それ、もう死んでるぞ」

無口だつた少年が初めて発した最初の言葉はひどいものだつた。悪気があつたのか知らないがしつとした口調はこの場で身を制して死んだ少女に対する想いなど感じられなかつた。

「…………」

雫は何も発しづ、黙つてゐる。

「供養が終わつたのならさつさと行こつ。こゝも安全とは言い難いし上物の餌があるから直ぐに湧いてくる

雫の肩がフルフルと揺れる。

気づいていないのか、男子生徒は構わぬ続ける。

「行くぞ。さつき言つた通り『それ』はもう死んでいる

男子生徒が雫の肩を掴んだ時、雫は掴んだ手を払いのけ、立ち上がり後を引いた。

「さつきから何よ！ それそれって！ 陽子を何だと思つてゐるのよ！ なんで陽子が死ぬのよ！ 何であなたがいるのよ！ 答えてよ！ 氷室君

！」

涙と怒声の声はバットを持ち先ほどから佇んでいた男子生徒「氷室徹夜」に向けられた。

氷室と彼女達は偶然会つたのだ。

氷室がこの異常な事態を認識したとき彼は旧館の化学準備室に向かつていた。化学準備室の前にたどりつき、さあ入ろうと思ったとき、絹を裂くような女の悲鳴が聞こえ、準備室を後回しで小教室にへと向かつた。

もともと生存者がいれば共に行く予定であつたため寄り道に悔いは

なかつた。

教室内では女生徒に数体のゾンビが群がつていた。近くに連れでもうか、もう一人女生徒がいたがことは緊急を要していたため、まともな確認を取らずゾンビの頭部にフルスイングをぶちかました。頭部の破壊と共に、頭蓋骨の隙間から脳が飛び出し床を汚した。

お構いなしに2体目に入り、今度は首を狙つてバットを振つ。

首が120。位曲がつた時は気持ち悪いという意識よりも違つ意識に科せられたが構わず止めをさした。

最後一体は振り下ろす感じで、頭部めがけ振り下ろした。

スイカが割れるような音の後に頭部の穴といつ穴から血が噴き出た。頭部を中心に血がまき散る。この時に彼はうすら笑いをしていたが、零は陽子に夢中で彼の顔を見向きしなかつた。それが幸か不幸かは後々分かる事となる……

「……ああ、あ……くあ……」

突如うめき声が小教室に聞こえた。その場には氷室と美空そして死者の葉柱陽子しかいない。零も徹夜も口を声を上げていない。つまり……

「陽子、ああ陽子……生きていたのね……よかつた」

葉柱の体は小刻みに震えており、目も白濁色に染まつていて。いや、それよりも床には彼女が流した何リットルもの血液がある。そう、彼女は死んでいるのだ。

零は陽子に近づく。しゃがんで抱きつこうとした時、徹夜が陽子にバットを振り下ろした。

右寄りに当たつたバットは今までの分を含め多少へこんだ。右耳に血が噴き出て、頭部が破壊された男子生徒に噴きかかる。

零が何やら止めてだと拒否の言葉が聞こえていたが、徹夜は構わず続ける。

一度と起き上がりれないように徹底的に頭部をこなごなにする、潰れた頭部から脳が飛び散るまで殴り続け止めに陽子の口にバットの先端を押しこんだ。

歯が数本折れ、まるで押しつぶしたトマトのように陽子は無残な姿をしていた。以前の面影はなく、誰が見ても分からなくらい……

「ああああああ」

零が絶叫を上げ徹夜を押し倒し陽子に近づく。原型なき親友を抱きかかえ、泣き声交じりで陽子、陽子と呼び続ける。

沈黙が続く。数分が数時間に感じられた。

「……油断した。でも、もう動かないから安心しろ」

沈黙を破った徹夜は零に追い打ちをかける結果となつた。

零は立ち上がり一人で教室を出て行つた。

徹夜は後を追いかけようとせず、ため息交じりで

「俺つてやつはどうも女の扱いはなれてねえな」

もう一度深いため息をついた後少女を探しに再び危険な廊下にへと出た。

16:45

八条市

八条高校 体育館2F 管制実況室

木村加奈子は恋人の片岡修平と数人の彼の友達と共に体育館に逃げた。

当初、壁を超えて逃げようと考えていたが、柵から大量のゾンビが道路を占領していることがわかり退くことを余儀なくされた。

体育館に逃げる途中一人か三人がゾンビに捕まってしまった。自分の身が精一杯で助けることもできず、見捨てた。

加奈子はそのことを安全地帯に隠れてからずつと後悔していた。

悲鳴声と助けを求める声が耳に焼き付き今まで離れない。時折、修平が励ますが効果はまるでなかつた。

「生き残りはこれだけか?」

体育教師の曾我部は室内にいる生徒たちに確認を取る。

誰もうなづかない所から、生き残りは7人と分かつた。

「この中で携帯電話を持つているやつはいるか? いたら警察に電話してくれ」

生徒たちはそれぞれ携帯電話を取り出し電話をかけ始めた。

「……先生、電話が通じません」

一人の女生徒が手を上げ曾我辺に報告する。すると、次々にと電話が通じないと言い出した。

曾我辺は困惑しながらも男子生徒から携帯電話を貸してもらい、警察(110)にかける。

何度も「コード音が鳴つたが直ぐに電話オペレーターに切り替わる。「……お掛けになつた電話番号はただ今回線が混雑しているため少ししてからお掛け直しください。」こちらは……」

警察が使えないことで多少動搖したが直ぐに思考を変え、今度は自宅にへと掛けてみる。こんな事態なので家内には外に出るなど言っておきたい。教師といえども一人の人間、家族のことは生徒と同じくらい気にかけている。

コード音は長く続きいつまで経つても出ない。さすがに心配したが繋がつた。

「もしもし」

「…………」

返事はなかつた。それが不気味で仕方がなかつたが何度ももしもしと言つ続けた。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

荒い息継ぎが聞こえ電話が切れた。

携帯電話を生徒に返し、生徒からどうでしたと聞かれたが、なんでもないと答えた。

家族のことが不安だつたがそれよりも今は生徒のことだ。自分に言い聞かせるように何度も心の中で言い聞かせた。

改めて生徒を見ると、数人足りない。どこに行つたかと半ば焦つたがすぐに見つかった。

数人の生徒たちが放送器具をいじつていたのだ。突然何かを話しだした。

止めると注意するも、放送は校舎全域に広がつた。

16:52

八条高校

『「……通じた?』

「多分。設定通りなら全校放送のはず」

「ありがとう。お兄ちゃん、あたしは無事だよ。今体育館にいるの。心配しないで」

「放送を止めなさい」

「先生押さないで、危ない」

「先生とも一緒に、だから、」

「生き残りは体育館に集まれ!ここには今、8人いる!学校のバスを使って脱出したいなら今　直ぐ来い

「こら、勝手に……」

「じゅん…私も無事よ」

「おい、ちょっと、じゃあ俺も……」

「体育教師の曾我辺だ!このことは気にするな!先生が今から校舎に向かうからそれまでは　一步も動くな!いいな!」

「ちょっと、先生!」

「うわ、……』

幸か不幸か？蓄積した水は決壊しゆく……

第3話（後書き）

葉柱陽子（17）
零の親友。教室内で逃げ込んだ際、窓から侵入してきたゾンビに零をかばつて死んだ。趣味はプリクラ。逃げる途中、プリクラの入った生徒手帳を落とした。

美空零（17）

氷室の同級生で委員長。腰まで伸びたロングの髪が特徴。氷室のこと気にかけていたが裏切られる形に。4人兄弟の長女。次女は小学3年生。

曾我辺義明（38）

体育教師。ジャージと白のランニングシャツが特徴。二人の子供（一人成人で別居）と妻がいる。電話の相手はいつたい……

おまけ

副会長

よくいる真面目タイプの仕切り屋。度々意見の合致で衝突することもしばしば。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4621g/>

zombie crisis

2010年10月11日20時27分発行